

# 災害の経験を伝える — 忘れないために —

矢守 克也

## 1. 「災害は忘れた頃にやってくる」？

このフレーズ（言葉）は、寺田寅彦によるものとされている（写真1）。



写真1 寺田寅彦

([http://rnavi.ndl.go.jp/kaleido/img/J141\\_16.jpg](http://rnavi.ndl.go.jp/kaleido/img/J141_16.jpg))

たしかに、そうである。しかし、寺田はこの通りのフレーズを口にした（書き残した）わけではない。このフレーズは、正確には、「天災と国防」と題されたエッセーの中に次の形で登場する（寺田,1997; なお初出は、1934年（昭和9年）に刊行された「経済往来」という雑誌）。一節によれば、寺田の弟子にあたる中谷宇吉郎が、「天災は忘れた頃来る」を寺田自身の言葉として紹介したが、解説を求められて出所を探してみると見当たらず、このエッセーに似たようなことが書いてあるとの説明で勘弁してもらったらしい（週刊防災格言, 2009）。

『それで、文明が進むほど天災による損害の程度も累進する傾向があるという事実を十分に自覚して、そして平生からそれに対する防禦策を講じなければならぬはずであるのに、それが一向に出来ていないのはどういう訳であるか。その主なる原因は、畢竟そういう天災が稀にしか起らないで、ちょうど人間が前車の顛覆を忘れた頃にそろそろ後車を引き出すようになるからであろう。』（寺田, 1997,p.316）

この最後の部分が、著名なフレーズとして今日に伝えられている。しかし、この最後の部分だけを若干改変しつつ抽出したことが、このフレーズの正確な理解、より適切な理解を妨げているのではあるまいか。

すなわち、「災害は忘れた頃にやってくる」は、

ともすれば、以下の2つのことを意味していると思われるがちである。第1は、巨大地震や津波、火山災害など、ハザードそのものが発生するインターバル（間隔）は、人間の側の感覚に立つと非常に長いことが多いという警告である。これは、「災害は忘れた頃にやってくる」の自然現象的理解とも呼べるものである。第2は、— 結局上記と同種のことになるが — 人間とは実に忘れっぽい動物で、大切な教訓も大きな痛手も案外早く忘れてしまうものだという警告である。これは、「災害は忘れた頃にやってくる」の心理的分析的理解とも呼べるものである。

しかし、筆者の見るところ、寺田の警句は、こうしたこと（だけ）を問題にしているのではない。そのことは、上記の引用部分を十二分に読解するとともに、その前後の文章を眺めてみることから分かる。先の引用箇所少し前で、寺田はこう述べている。

『文明が進むに従って人間は次第に自然を征服しようとする野心を生じた。そうして、重力に逆らい、風圧水力に抗するような色々の造営物を作った。そうして天晴れ自然の暴威を封じ込めたつもりになっていると、どうかした拍子に檻を破った猛獣の大群のように、自然が暴れ出して高樓を倒潰せしめ堤防を崩壊させて人命を危うくし財産を亡ぼす。』（同書p.313-314）

『文化が進むに従って個人が社会を作り、職業の分化が起って来ると事情は未開時代と全然変わって来る。天災による個人の損害はもはやその個人だけの迷惑では済まなくなってくる。』（同書p.315）

また、引用箇所の直後を以下のように続けている。ここでは、今日にもそっくりそのまま当てはまりそのような事例が挙げられ、上記の引用箇所について解説している。

『しかし昔の人間は過去の経験を大切に保存し蓄積してその教えに頼ることが甚だ忠実であった。過去の地震や風害に堪えたような場所にのみ集落を保存し、時の試練に堪えたような建築様式のみを墨守してきた。…（中略）…大震後横浜から鎌倉へかけ

て被害の状況を…（中略）…古い村家が存外平気で残っているのに、田圃の中に発展した新開地の新式家屋がひどくめちやくちやくに…（中略）…小学校建築には政党政治の宿弊に根を引いた不正な施工が附纏っているというゴシップも…。』（同書p.316-317）

これらから判断すると、「災害は忘れた頃にやってくる」というのは、単に、ハザードのインターバルが長いとか、人間が忘れっぽいとか、だから、被災経験を伝えることが重要だとか、そういうことではなくて、自然と人間の関わり方、あるいは、人と人との関わり方、すなわち、ある種の〈関係性〉についての警句であることがわかる。

寺田の真意を筆者なりに踏まえるならば、この著名なフレーズは、むしろ、「災害は安心した頃にやってくる」と言い換えることが可能だし、適切ではないかと思う。「堤防ができたから、もう安心」（技術やハードに向けられた安心）、「防災のことは専門家に任せたから、もう安心」（プロフェッショナルリティやソフトに向けられた安心）—寺田は、こういった「もう安心」に対して、「人間が前車の顛覆を忘れた頃にそろそろ後車を引き出すようになる」と警鐘を鳴らしているのではないだろうか。

では、ここで言う「安心」とは、何か。「災害は忘れた頃にやってくる」の真意を逸さないためにも、少しまわり道をして、「安心」についてじっくり考えておこう。

## 2. 安全と安心

防災・減災の領域だけでなく、健康問題や食品の話題に至るまで、今日、日本社会では「安全・安心」のフレーズを耳にしなれない日はないと言ってよいくらいである（図1）。この2つの語は、通常、専門家が「客観的な『安全』を技術的に追求することを通して、1人1人の主観的・心理的な『安心』を保証することを目指す」（藤井, 2009）という意味でとらえられることが多い。しかし、この後見ていくように、両語の関係は、一見そうであるほど単純ではない。

完全無欠を意味するラテン語（sollus）に由来すると言われる「安全」（safety）とは異なり、「安心」を表す英単語の一つセキュリティ（security）は、ラテン語のse-（～から離れて、免れて）とcura（英語のcare: 心配, 気遣い）に分解できるという。つまり、セキュリティとは、心配, 気遣いがない状態を意味する。ここでは、安心が、個人の気持ち（心理）の問題としてとらえられているように見える。



図1 「安全・安心」の大合唱

<http://finalf12.blog82.fc2.com/blog-entry-369.html>（左）  
<http://www.pref.yamanashi.jp/news/200408/1092719572926.html>（右）

しかし、重要なことは、「なぜ気遣いしなくていいのか」である。それは、自分の代わりに、心配の種について気遣ってくれる存在があるからである（市野川・村上, 1999; 大澤, 2008a）。近代化以降の社会では、多くの場合、その役割は、それぞれの心配の種に関する専門家や行政官（実務者）が担っている。別の言い方をすれば、多くの現代社会では、一般の人びとがcura（気遣い）を「外化」する（専門家や行政官に気遣いを委ね、完全にお任せすることを通じて心理的な安心を確保する、という〈関係性のスタイル〉をとっている。

このように考えると、安心—そして、「災害は忘れた頃にやってくる」—は、単に心理的な問題なのではなく、人と人との関係性、あるいは、社会構造にかかわる問題だということがわかる。「専門家と素人のリスク認知のギャップ」、「専門家不信」、「素人の過大なゼロリスク要求」といった用語で「安全・安心」について語っているとき（中谷内, 2006, 吉川・竹村・藤井, 2006）、私たちはみな、上記のような〈関係性のスタイル〉—〈近代的なスタイル〉と呼ぼう—の上に立って、「安全・安心」について論じていることになる。

上で列举した問題群は、〈近代的なスタイル〉を採用した社会では、たしかに実践的に重要な課題である。しかし、これらの問題が問題として現れるのは、〈近代的なスタイル〉の枠内の話であること、さらに、〈近代的なスタイル〉が「安全・安心」を社会的にとり扱う唯一無二の方式ではないことを十分認識することも重要である。

## 3. 神だけができる気遣い（cura）

たとえば、ある種の心配の種については、この世に生きる者はだれも—専門家ですら—cura（気遣

い)できないと考える〈別のスタイル〉がある。別言すれば、唯一curaすることが可能な超越的で絶対的な存在(神や仏)と、curaとの関与が一切封じられた私たち人間とが関係していると考えられる〈別のスタイル〉がある。防災・減災の領域で言えば「天譴論」や「運命論」(\*注1)として語られてきたこの種の考え方は、〈近代的なスタイル〉の見地からは、ハザード(地震やウイルスといった災いの種)に対する人びとの積極的な関与(予測やコントロール)を放棄させかねない、途方もなく非生産的な考え方に映るかもしれない。

しかし、たとえば、次のような事実を考えてみるとよい。インド洋大津波(2004年)は、無視できない数の被災者にとって、現在も「(イスラムの)神が与えた試練」、つまり、専門家や行政官も含めすべての人間の気遣い(cura)の及ばない出来事である(写真2)。こうした理解によって、たとえば、「津波防波堤を作っておけば…」、「津波情報網を整備しておけば…」と仮定法過去完了形で、津波がcuraすべき対象、ないしcuraしうる対象だったと教えられるよりも、はるかに大きな安寧(安心)を得ている被災者が何万人も存在することを忘れてはならない。少なくとも現段階では、十分なハードやソフトを整備するだけの資金も技術力も政治的・社会的安定も欠く人びとにとっては、curaを専門家に成功裏に「外化」することによって安心を得るという〈近代的なスタイル〉そのものを拒絶することが、むしろ安心を獲得する方法なのである。



写真2 インド洋大津波被災地のモスク  
(<http://www.surfedge.com/ache.html>)

#### 4. 安全・安心をとことん追求すると…

また、現在の日本において、「自助・共助」(個人・家庭や地域社会での防災活動)が重要視されている事実は、裏を返せば、これまで防災に関する「安全・安心」を一手に担ってきた専門家や行政官(「公助」)の側が、「私たちだけに気遣い(cura)を背負わせるのは、もう勘弁してください」と主張して

いるのと同じことである(矢守, 2005; 2009)。同様に、医療における「インフォームド・コンセント」の普及に象徴される「自己責任」の風潮や、医師や医療機関が保険に入らざるを得ないという現実も、医療技術の上でも、医師と患者の関係性の上でも高度に複雑化した今日の医療においては、専門家(医師や病院)を含め、だれもcura(に伴う責任)の専一的な引き受け手になりえていないことを示している(大澤, 2008b)。

「安全・安心」に関する〈近代的なスタイル〉, すなわち、すべての気遣い(cura)について、その責任主体を社会的に同定し確定しようとするスタイルが、究極的には、訴訟社会(「これは私でなくあなたがcuraすべきことだ」という主張合戦)や保険社会(「仕方がない、みなで広く薄くcuraを負担しましょう」という妥協ないしごまかし)へとつながることは、米国社会の現状がよく示している。別の言い方をすれば、〈近代的なスタイル〉の最先端の状況は、気遣い(cura)の、少なくともその一部は、だれも担うことができないような状態で放置されるほかないことを暗示している。皮肉なことに、この状態は、まさに、「(少なくとも一部の)curaは神のみぞ知る」という、もともとの〈関係性のスタイル〉に、言わば一周回って回帰したものに他ならない。

#### 5. 新しい〈関係性〉— 忘れないために

こうした現状を踏まえて、これまで述べたものとは異なるタイプの〈関係性のスタイル〉が、今新たに、模索されようとしている。つまり、〈近代的なスタイル〉において気遣い(cura)が行き場を失っている現状を、curaの取り扱いに関する行き過ぎた外化(お任せ化)のために生じた危険な状態と考え、新しい〈関係性のスタイル〉を模索しようとする動きである。言いかえれば、ハード(たとえば、津波防波堤や耐震建築)や専門家(たとえば、気象庁の専門家や市町村役場の実務者)にすべてお任せして(「外化」して)、curaを完全に忘れ去って「安心」しきるという〈近代的なスタイル〉を解消し、新たな〈関係性のスタイル〉を模索しようとする動きがある。

この動きは、要するに、この社会に暮らす者一人一人が、自然災害に関する気遣い(cura)を忘れることなく、今一度この身に引き受け直すための動きである。ここでは、筆者自身のものも含め2つのとり組みについて紹介しておこう。

## 6. 「雨プロジェクト」

最初の事例は、ウェザーニュース（株）が展開している「雨プロジェクト」をはじめとする数々の参画型の気象観測と災害情報共有のためのとりくみである（図2）。2009年に5年目を迎えた「雨プロジェクト」について、ウェザーニュース社（2009）は、以下のように説明している。「『雨プロジェクト』は、今年で5年目を迎え、昨年は雨雲の“位置”および“勢力”を一般の方と共に観測、その情報リアルタイムに反映し、より細かい時間単位での気象予測を試みる「10分天気予報」を展開しました。今年の『雨プロジェクト』は実態を掴むことが難しいとされる梅雨前線を正確に捉えるため、その地域に住む人にしか感じない“気象感性”の情報を集約し、これからの天気や梅雨前線の正確な勢力、位置を捉え、その情報を逸早く利用者と共有することに挑みます」。



図2 「雨プロジェクト」

<http://weathernews.com/jp/c/press/2005/img/2005ameproj.jpg>

ここで言われている「一般の方」や「利用者」とは、このプロジェクトに参画することを表明し、メンバーとして登録した「全国4万人のウェザーリポーター」のことである。これらの人びとによる「観測」ならぬ「感測」の結果（雲の様子、雨の降り方など）が、梅雨前線の位置の特定やいわゆる「ゲリラ豪雨」の予測などに、専門機関が取得した情報（ウェザーニュース社のインフラを通して得た観測情報や、ウェザーニュース社から見れば他組織となる気象庁が公表している観測情報）と組み合わせられる。同社の気象予報や対応行動の推奨は、この両者の産物として生まれる。

これらのプロジェクトの基本哲学として同社が掲げているのが、「ジョイン&シェア（join & share）」の原則、すなわち、「参加と共有」の原則である。同社の担当者によれば、とり組みを支えているのは、「他人の役に立ちたい」という参加者たちの動機で

ある。参加者の実際の言葉を借りれば、「自分の指一本で（ケータイで）他人の命を守ることができる」という感覚である（\*注2）。この他者へ向けられた動機が「参加」を促し、情報の「共有」を介して、自分の安全へと還ってくる。これは、「自助第一、共助第二」ではなく、むしろ、共助こそが自助を駆動しているとの見方でもある。「まず自分の命を守る」という「自助」の動機ありきではなく、むしろ「まず他者の命を守りたい」という他者へ向けた動機がその相互反射によって、「共助」のための社会的な仕組みを形成する。それが、結果として「自助」に回帰してくるのである。

「ジョイン&シェア」とは、災害情報の発信者と受信者、災害情報に関するプロとアマ、援護者と要援護者といった固定的な区分によって、自然災害に関する気遣い（cura）を他人（他機関）に「外化」してしまう（近代的なスタイル）への挑戦でもある。「ジョイン&シェア」とは、多くの人が自然災害へのcuraを忘れることなく、それに対して注意を払う活動に「参加」し、その活動の成果を参加者全員で「共有」することに他ならない。

通常、「災害の経験を伝える」（本稿のタイトル）という、「過去の災害経験」を語り継ぐ活動や、地図、ゲーム、ワークショップといった媒体（メディア）を用いた「過去の教訓」の伝達や学習場面が思い浮かぶ。事実、筆者自身も、こうした活動にも関心をもって研究や支援活動を続けてきた。たとえば、前者については、阪神・淡路大震災の被災者が結成した語り部グループにおいて10年以上続けてきたアクションリサーチや、子どもとして同震災を経験した若者による語り継ぎを中心にした「災害メモリアルKOBÉ」というイベント（矢守、2010を参照）、後者については、「クロスロード」と呼ばれる防災ゲームを用いた実践（矢守・吉川・網代、2005；吉川・矢守・杉浦、2009；Yamori, 2007；2008；2009）などである。

これらとは対照的に、「ジョイン&シェア」は、「過去の災害経験」ではなく、言ってみれば「現在の災害状況」を伝えるための仕組みである。「災害の経験を伝える」ための様式には、このようなスタイルもあることに留意しておきたい。

## 7. 「満点計画」

2009年12月、筆者らは、京都府京丹波町の下山小学校を訪れ、小学生たち（5、6年生）とともに1台の地震計を学校の片隅に設置してきた（写真3）。こ

の地震計は、京都大学防災研究所附属地震予知研究センターが進めている「満点計画」（次世代型稠密地震観測）の一環として設置したものである。「満点計画」は、新たに開発された小型・安価で保守の容易な地震計を数多く（万点）に設置して充実した観測網を作ることによって、理想的な、つまり、満点の地震観測を行おうという計画である。



写真3 地震計を設置する子どもたち  
(京丹波町下山小学校にて；筆者撮影)

ところが、大きな問題が一つあるという。設置場所の確保に苦勞しているらしい。筆者は、この話を聞いて、「それなら、学校に置いてはどうか」と思い立った。そうすれば、研究者は設置場所を確保できるし、地震計の保守やデータ回収作業も省力化できる。これらの作業は、小学生にも十分できる程度にまで簡素化されているからである（上記の下山小や、同小に続いて地震計を設置した鳥取県日野町の根雨小学校では、すでに子どもたちが作業を担っている）。

容易にわかるように、「満点計画」では、本物の地震研究に小学生たちが「一役買っている」（地震を忘れることなく、それに対するcuraの一角を担っている）。小学生たちが担当しているのは、研究全体の、文字通り万分の一（多くの観測点のうちのたった一つ）かもしれない。しかし、そこで得られたデータが実際に「満点計画」に活かされているし、設置に先立って実施した授業や、観測データを回収した後に実施した授業でも、子どもたちにそれがわかるよう工夫した。

近年頻発する災害をうけて、防災教育に対する関心は一定の高まりを見せている。しかし、防災教育の多くが、「本物」の災害研究や防災実践にあたる人たち（専門家）と、一般の人びと（子どもたち）とを分断する結果をもたらしていないだろうか。素人には素人用にわかりやすく編集した情報だけを知らせておけばよい、子どもなんだから水消火器を使った訓練で十分だろう。この種の態度である。これでは、「本物」と「まがい物」の溝はいつこうに埋

まらないばかりか、かえって広がるばかりである。そして、このことが、人びとを「安心」させ、「災害が忘れた頃にやってくる」という結末を招いている。

もちろん、専門家の世界と一般の世界との間にちがいはある。しかし、両者は断絶しているのではなく、その間にアクセス路があることをみなが実感するような形で、防災教育は実施されねばならない。

「満点計画」という地震研究の最先端も、その最前線は、データや数式（だけ）ではなく、むしろ、セメントをこねて機器を固定するといった具体的で身体的な作業である。その具体的な作業が「本物」の地震研究とつながっているという実感を子どもがもつことが大切である（理論的には「実践共同体への正統的周辺参加」と呼ばれる（矢守, 2009））。また、このアクセス路を反対側から眺めれば、研究者にとって、この作業は、そこを出発点として歩んできたという意味で、自分のルーツの場を指し示しているとも言える。

一見遠く隔てられているかに見える両者—専門家と一般の人びと—は、共に同じ実践に参加し、共に自然災害に対する気遣い（cura）を担っていかねばならないのである。寺田の言う「災害を忘れない」とは、そのような〈関係性のスタイル〉を社会的に構築することだと、筆者は考える。

## 注

### \*注1

廣井（1986）によれば、災害に関する「天譴論」とは、「天が人間を罰するために災害を起こす」という思想や観念のことであり、「運命論」とは、「自然のもたらす災害と、そこにおける人間の生や死を避けられない運命と考え、これを甘受する思想」とされる。

### \*注2

この裏側には、たとえば、いい加減な情報を発信すれば、指一本で他人の命を奪うこともありうるという否定的見解がある。これは、より一般化して言えば、「感測」の精度や信頼性、報告の正確性を問題視する見解であり、防災情報のとり扱いをめぐる同社と気象庁との葛藤（たとえば、朝日新聞社, 2009）の背景にも、この問題が潜んでいると言える。

## 謝 辞

「雨プロジェクト」など、ウェザーニューズ社のとりにくみについては、同社の中神武志氏、宇野沢達

也氏、日置江桂氏から直接、貴重なお話しをうかがうことができた。心から感謝申し上げたい。

また、「満点計画」の推進にあたっては、京都府京丹波町立下山町学校、および、鳥取県日野町立根雨小学校より多大なご協力をいただいている。深甚の謝意を表したい。

### 参考文献

- 朝日新聞社 (2009) : ウェザーニュース社vs.気象庁 — 台風論争 波高し 朝日新聞 (2009年10月19日付) .
- 市野川容孝・村上陽一郎 (1999) : 安全性をめぐる 現代思想, 1999年10月号.
- ウェザーニュース社 (2009) : 全国4万人の五感を集結し梅雨前線を捉える「雨プロジェクト」スタート～コンピューターでは捉えられない人間の"気象感性"から天気予報する新しい試み～ ウェザーニュース社ウェブサイト「ニュースセンター」から.  
[<http://weathernews.com/jp/c/press/2009/090616.html>]
- 大澤真幸 (2008a) : 〈自由〉の条件 講談社.
- 大澤真幸 (2008b) : 不可能性の時代 岩波書店.
- 吉川肇子・竹村和久・藤井聡 (2006) : 安全安心と合意形成 堀井秀之(編)安全安心のための社会技術. 東京大学出版会. pp.287-304.
- 吉川肇子・矢守克也・杉浦淳吉 (2009) : クロスロード・ネクスト— 続: ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション— ナカニシヤ出版.
- 週刊防災格言 (2009) : 週刊防災格言#100 (「災害は忘れたころにやって来る」) .  
[<http://yaplog.jp/bosai/archive/171>]
- 寺田寅彦 (1997) : 天災と国防 寺田寅彦全集 (第7巻) 岩波書店.
- 中谷内一也 (2006) : リスクのモノサシ— 安全・安心生活はありうるか 日本放送出版協会.
- 廣井 脩 (1986) : 災害と日本人— 巨大地震の社会心理— 時事通信社.
- 藤井 聡 (2009) : 安全と安心の心理学 日本建築学会総合論文誌, 7, pp.29-32.
- 矢守克也 (2005) : 〈生活防災〉のすすめ— 防災心理学研究ノート— ナカニシヤ出版.
- 矢守克也 (2009) : 防災人間科学 東京大学出版会
- 矢守克也 (2010) : アクションリサーチ— 実践する人間科学— 新曜社.
- 矢守克也・吉川肇子・網代 剛 (2005) : ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション— 「クロスロード」への招待— ナカニシヤ出版.
- Yamori, K. (2007): Disaster risk sense in Japan and gaming approach to risk communication. *International Journal of Mass Emergencies and Disasters*, 25, 101-131.
- Yamori, K. (2008): Narrative mode of thought in disaster damage reduction: A crossroad of narrative and gaming approach. In Sugiman, T., Gergen, K., Wagner, W., and Yamada, Y. (eds.) *Meaning in action: Constructions, narratives and representations*. p.241-252. Tokyo: Springer-Verlag.
- Yamori, K. (2009): Action research on disaster reduction education: Building a “community of practice” through a gaming approach. *Journal of Natural Disaster Science*, 30, 83-96.